

渡日前日本語学習 (I 日本語・日本事情)

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学国際連携推進機構 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 良造, 池田, 聖子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/0002000210

渡日前日本語学習

佐々木良造・池田 聖子

1. 渡日前日本語学習

本学では、2015（平成27）年度に大学院総合科学技術研究科（修士課程）を設置し、英語のみでの学位取得が可能な留学生の受け入れを開始した。英語のみでの学位取得を目指す留学生を受け入れるにあたり、10月入学外国人留学生英語コース特別入試を実施している。

上記の特別入試を経て本学に入学する大学院生を対象とし、2021（令和3）年度から、渡日する前の8月ないし9月に日本語を学習する機会を提供しており、これを「渡日前日本語学習」と呼んでいる。日本語学習は、個別に学習する内容を指示し、受講者が自身の都合に合わせて日本語学習を行うオンデマンド型とZoomを利用した双方向オンライン型のハイブリッド式で行っている。なお、渡日前日本語学習は日本語科目としての単位認定の対象ではない。詳しい経緯は、本紀要4号の佐々木・熊井・袴田による報告を参照されたい。

2. 渡日前日本語学習実施前準備

2022年度入学予定者全員に渡日前日本語学習を通知し、参加者を募集したところ、34名が受講を希望した。Zoomセッションの希望時間帯（日本時間午前（11:00－11:45）または午後（13:30－14:15））を調査し、34名を17名ずつの2つのグループに分けた。

受講希望者には、渡日前日本語学習で使用する教材『いろどり』（国際交流基金）のウェブサイトから教材を各自、ダウンロードするよう指示した。

3. 渡日前日本語学習の学習内容とスケジュール

渡日前日本語学習の範囲は2021年度と同様、以下の3点とした。

1. ひらがな・カタカナの読み書き
2. 基本的な語彙の導入と語彙の読み書き練習
3. 基本的なあいさつ（『いろどり』第2課まで）

2022年度の渡日前日本語学習のスケジュールは、以下のとおりである。

2021年度はオリエンテーション後、オンデマンド型の文字学習期間（約1か月）を経てZoomを利用した週1回の双方向オンライン型の授業を1か月間実施した。学習内容は文字と基本的な挨拶と、特段難しい内容ではなかったため、約2か月という学習期間は長すぎた。2022年度は10月に渡日する前に集中的に日本語学習の機会を提供することとした。

9月 5日(月) オリエンテーション
自己紹介
ひらがな（あ・か・さ行）

- 6日(火) 挨拶（会ったとき、『いろどり』第1課-1）
ひらがな（た・な・は行）
- 7日(水) 挨拶（別れるとき、『いろどり』第1課-2）
ひらがな（ま・や・ら・わ行、撥音「ん」）
- 8日(木) 挨拶（お礼を言う・謝る、『いろどり』第1課-3）
ひらがな（濁音・半濁音）
- 9日(金) 挨拶の復習
ひらがな（拗音・促音・長音）
- 12日(月) 聞き返す（『いろどり』第2課-1）、数字（1から10まで）
カタカナ（ア・カ・サ行）
- 13日(火) 日本語やほかの言葉ができるかどうか質問する（『いろどり』第2課-2）
カタカナ15文字（タ行・ナ行・ハ行）
- 14日(水) 日本語の言い方がわからないとき、どう言えばいいか質問する
（『いろどり』第2課-3）
カタカナ16文字（マ行・ヤ行・ラ行・ワ行・撥音「ン」）
- 15日(木) カタカナ（濁音・半濁音）
- 16日(金) 自分の出身国・地域と名前をカタカナで書く（入力する）
カタカナ（拗音・促音・長音、外来語の表記）

4. 渡日前日本語学習の到達状況

3. で述べた学習内容に沿い、担当者の主観的な評価を述べる。

ひらがなの読み書きは、概ねできるようになったと言えるだろう。カタカナの読みについては、文字のデコードに時間がかかるものの読むことはでき、カタカナの書きについては自分の名前、出身国・地域が書けるようになった。基本的な語彙については、聞く・話すことはできるようになったが、ひらがな・カタカナの読み書きと同様、できることは限定的である。基本的なあいさつについては、渡日直後から使う機会がある挨拶はできるようになったと考えられる。後半で練習した聞き返し・質問については、母語話者への働きかけあるいは母語話者との交渉が必要であるため、学習の時点では常套句（フレーズ）として覚えるに留まった感がある。

5. 渡日前日本語学習実施の検証

渡日前日本語学習実施に係る検証の指標として、渡日前日本語学習の出席率と入学後の日本語学習継続率を検討する。

まず、渡日前日本語学習のZoomによる双方向オンライン型の授業の出席率は、全体で72.4%であった。平均すると、2週間・10回のZoomセッションのうち、7回は出席していたことになる。一方、午前の時間帯と午後の時間帯の出席率は85.9%と58.8%で午後のセッションの出席率が低かった。午後のセッションの出席率が低かった理由として、

(1)申し込んだにもかかわらず、ほとんど出席しなかった者が6名いたこと。

(2)日本語をある程度学習した経験がある者が2名ないし3名いたこと。
の2点があげられる。

渡日前日本語学習に参加した学生34名のうち、入学後になんらかの日本語科目を履修した学生(継続率)は、34名中27名で79.4%であった。入学後に日本語科目を履修しない(あるいは、日本語科目が履修できない)理由は、専門の授業とのバッティングと研究活動が主な要因である。修士課程の大学院生であるため仕方がないと言ってしまえばそれまでであるので、今後、どのように日本語学習の機会を提供したら、より多くの大学院生が日本語学習の機会が得られるか、検討が必要である。

また、上記27名のうち19名が日本語初学者を対象とした日本語科目「日本語1A」を履修した。19名のうち、単位取得者は9名、47%であった。「日本語1A」で学ぶ日本語のレベルは、日本の学校教育で学ぶ英語と比較すると、中学3年生レベルである(CEFRでいうと、英語も日本語もA1レベル)。大学院で学ぶ留学生が中学校3年生レベルの英語で学ぶ語彙や文法の理解に苦しむことは想像し難い。

大学院留学生は英語で学位取得可能な教育プログラムで学んでいるため、日本語学習の経験がない者がほとんどである。日本語学習の経験がない学生を対象とした日本語科目は、現在、日本語科目「日本語1A」のみである。「日本語1A」は、週4回、1回1コマ(90分)の授業であるため、専門科目とのバッティングや授業時間以外に研究活動に時間を割かなければならない大学院生にとっては大きな負担となり、週4回の授業を履修することはできない。これは、主として交換留学生を対象に開講している日本語科目を大学院生が聴講するという形で日本語学習の機会を提供していることに起因する問題である。「日本語1A」に大学院生が参加するのではなく、大学院生の状況に合わせた日本語学習の機会を提供することが求められるだろう。

6. 今後の課題

2022年度、渡日前日本語学習はすべてオンラインで実施していること、受講者との連絡手段もEmail等オンラインに限られること、渡日前の受講者の状況についての情報がないことなどから、Zoomセッションを欠席した理由や不参加の理由がわからず、Zoomセッションを担当する講師に精神的な負担がかかった。また、渡日後の日本語科目履修者(継続率)が79.4%であることから、大学が提供する日本語科目への橋渡しにはなっているとは言えるものの、「日本語1A」の単位取得率が47%であることから、その後の日本語学習の成果に結びついているとは言えない。

渡日後の日本語学習において、渡日前日本語学習のアドバンテージを活かせないのであれば、渡日前日本語学習の内容を見直す必要がある。上述の渡日前日本語学習の内容のうち、渡日前日本語学習の接続先である「日本語1A-F」で最も役に立つことは、先行して文字学習を行うことだろう。現状では、渡日前日本語学習参加者もZoomセッション担当者も、労多くして功少なしという状況であることは否めない。こうした点を踏まえ、2023年度の渡日前日本語学習の内容を検討したい。

※おもな執筆担当箇所は次のとおりである。

佐々木 1、2、4、5、6

池田 3